

新 知 故 温

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(72) 平成15年8月1日

江戸期・明治初期の暦書(その2)

福沢諭吉 『改暦弁』(449.3/㊦)

明治5(1872)年11月9日、政府は突然、太陰太陽暦から太陽暦に移行する改暦の詔書を発表しました。同時に太政官の布告により、明治5年12月3日を明治6年1月1日とすること、時刻の表し方を1日12辰刻法(昼夜をそれぞれ6等分する時刻の定め方。江戸時代は昼夜の長さが季節により変動する不定時制でした。)から1日24時間の定時制に切り替えること、を布達しました。発表から実施まで、わずか23日しかありません。飛脚に頼る郵便制度(明治4年12月5日[太陽暦では明治5年1月14日]に始まった東京・長崎間の郵便は95時間の所要時間を予定していました。)簡易な電文しか打てない電信(明治5年4月22日[5月28日]に東京・横浜間に加え京都・大阪間の電信が始まりました。)日刊ではない新聞、もちろんラジオもテレビもないといった当時の情報伝達手段では、版木で刷られた詔書や布告が地方にまで届くのには数日から十数日かかったと言われます。伝える側も伝えられる側も大慌ての様子が想像されます。

政府が改暦を急いだのはなぜなのでしょう。理由の1つに、欧米諸国との国交を開いた日本にとって、暦の違いは読み替えを必要とし、不便であったことが挙げられます。また、もう一つの重要な理由に、政府が直面していた財政難があります。明治6年は太陰太陽暦のままで行くと閏年で、6月が2回あり1年13ヶ月になります。明治4年に役人の給与を年俸制から月給制に改正していたので、政府は13回、月給を支給しなければなりません。1年12ヶ月の太陽暦に移行すれば、明治6年の月給1ヶ月分の支出を削減することができます。このことは当時、財政担当の参議の地位にあった大隈重信が明治27年に刊行した『大隈伯昔日譚』(210.508/31-2)の「使節派遣中の政事」の章に記されています。

突然の改暦に戸惑う庶民に対し、政府からの納得のいく説明や広報活動はほとんどありませんでした。そうした中で、いち早く太陽暦の解説書である『改暦弁』を著したのが福沢諭吉です。他にも太陽暦の解説書は続々と刊行されましたが、わかりやすさの点で『改暦弁』は群を抜いており、またたく間に20数万部が売れたと言われています。『改暦弁』はわずか10丁の小冊子で、「太陽暦と太陰暦との弁別」「ウイークの日の名」「一年の月の名」「時計の見様」の各章から成ります。身近な題材を使ってわかりやすく説明しています。例えば、行燈を太陽に、独楽を太陽の周りを回る地球に見立て、自転と公転を説明したり、およそ360文払うべき借金を月々29文5分づつ支払うと1年で約11文不足するとし、太陽暦と太陰暦の1年の日数の違いと閏月を説明しています。当館所蔵の『改暦弁』は標題紙に「明治六年一月一日発兌」「慶應義塾蔵版」とありますが、出版地、出版者は不明です。

改暦後のエピソードを『明治ニュース事典』(216/182)から拾ってみると、「新旧暦の間違いで押かけ嫁入り」(婚礼の日を間違えた)「大の月、小の月おぼえ歌」「改暦に伴う年齢計算方法」などの見出しがあります。また、改暦以降、行事や記念日の日付が、太陽暦で換算して示されるようになったものもあります。例えば明治天皇は嘉永5(1852)年9月22日生まれで、天長節は当初9月22日でしたが、明治6年以降は、生年月日を太陽暦で換算し、11月3日を天長節としています。なお、改暦詔書発布の明治5年11月9日(太陽暦では明治5年12月9日)の11月9日は「太陽暦採用(公布)記念日」、12月9日は「カレンダーの日」です。

【参考文献】

- 『福沢諭吉全集』(081.6/㊦1)
- 『現代こよみ読み解き事典』(449.3/17)
- 『暦のからくり』(449.3/㊦)
- 『こよみ』(449.3/㊦)
- 『近代日本総合年表』(210.6/㊦)